

## ヨーロッパ東南アジア研究会議参加報告

立川京一

平成16年9月1日から4日まで、フランス共和国パリ市に所在するパリ第1大学（パンテオン＝ソルボンヌ）を会場に開催されたヨーロッパ東南アジア研究会議（本部はオランダのライデン大学に所在。）に参加した。同会議は今回で4回目の開催になる。本会議にはヨーロッパ各国を中心に米国及びアジアから、約300名の東南アジア研究者が集った。日本からは白石昌也早稲田大学教授ほか数名が参加していた。会議の目的は東南アジア研究の向上と参加者相互の交流促進である。発表テーマは、歴史、政治、外交、経済、社会、ASEAN地域統合、民族、ナショナリズム、エスニシティ、移民、宗教、地域紛争、暴力、保健衛生、メディアなど学際的である。今回はテーマ別に36の分科会が設けられ、筆者は冷戦初期の東南アジア・南アジアをテーマとする分科会「アジアにおける帝国の後退と冷戦の間で（1949～62年）」で「日本とアジアにおける初期の冷戦」と題する発表を行った（発表の内容に関しては、本誌掲載の拙稿を参照されたい）。

同分科会はフランスのリヨン第2大学講師兼東アジア研究所員のクリストファー・ゴシヤ氏が企画したもので、発表者には新進気鋭の研究者を集めた。また、ゴシヤ氏は9月3日・4日の2日間にわたった開催当日には総司会も務めた。同分科会設置の目的は概ね次のとおりである。

これまでもアジアからの帝国の後退については数多くの研究がなされているが、東南アジア・南アジア諸国が冷戦をどのように認識し、それにどう対処したかについてや、西欧帝国主義諸国のアジアからの後退とそれに代わる米国の進出、あるいは日本の再進出などについては、極めて少数の研究しかなされていない。また、近年は史料の新規公開によって冷戦期の共産主義諸国側の事情が一段と明らかにされつつあるものの、中国やソ連が非同盟を指向する東南アジア・南アジア諸国をどのように見ていたのかについては依然としてほとんど知られていない。このような問題意識からアジアにおける初期の冷戦の再考を試みたのである。さらに、一人の研究者がこのような広範な研究領域をカバーすることはとうてい不可能であるので、この機会を利用して複数の研究者がそれぞれの専門知識や言語運用能力を生かした研究成果を持ち寄ることによって全体像を作り上げようという意図もあった。

同分科会のプログラムは以下のとおりである。

平成 16 年 9 月 3 日

午前

オープニング・セッション

開会の辞 クリスチャン・オスターマン (米国、ウッドロー・ウィルソン・センター)

「背景設定—アジア・冷戦研究と脱植民地研究の交差点—」

第 1 セッション「帝国主義の後退と冷戦」

発表者 マーク・ローレンス (米国、テキサス大学)

「ベトナムの配役変え—バオ・ダイによる解決と東南アジアにおける冷戦の創始—」

マーティン・トーマス (英国、エクスター大学)

「脱植民地化の調査分析—英国のベトナム及びインドネシア情報の戦略的分析 (1945～50 年) —」

第 2 セッション「冷戦の到来」

発表者 リチャード・マソン (マレーシア、セインズ・マレーシア大学)

「封じ込めと非同盟の挑戦—冷戦と米国—インドネシア関係 (1950～52 年) —」

イリア・ガイダク (ロシア、科学アカデミー)

「ソ連の冷戦戦略と東南アジアにおける革命の見通し」

チェン・ジャン (米国、バージニア大学)

「革命と脱植民地化の架橋—中国の初期の冷戦経験における『バンドン精神』理解—」

午後

第 3 セッション「帝国主義の後退と冷戦の間での舵取り」

発表者 マックス＝ジャン・ザン (フランス、国際問題調査研究所)

「インドとアジアにおける冷戦」

ロランド・タランパス (フィリピン、フィリピン・マニラ大学)

「冷戦初期におけるフィリピンのナショナリズム—新植民地国家の共産主義と反共産主義 (1949～60 年) —」

第 4 セッション「非同盟のアジア的起源」

発表者 サミュエル・クロウル (米国、オハイオ大学)

「冷戦と踊りながら—独立と非同盟を目指したインドネシア外交のタンゴ—」

クリストファー・ゴシヤ (フランス、リヨン第 2 大学)

「1950年の冷戦の到来－革命下のベトナムと非共産主義アジア諸国の  
非同盟－」

平成 16 年 9 月 4 日

午前

第 1 セッション「アジアにおける冷戦文化」

発表者 レミー・マディニエ（フランス、社会科学高等学術研究院）

「敵と味方－冷戦下で共産主義と向き合うインドネシアのイスラム（1945～  
60 年）－」

ツオン・ヴァー（米国、カリフォルニア大学）

「冷戦を想像する－ベトナム革命と二極世界の到来（1940～54 年）－」

第 2 セッション「ドミノの押し戻し？」

発表者 立川京一（日本、防衛研究所）

「日本とアジアにおける初期の冷戦」

アン・チェン・グアン（シンガポール、ナンヤン工科大学）

「ドミノ理論に対する東南アジアの認識」

閉会の辞 ナヤン・チャンダ（米国、イェール大学）

「冷戦と帝国の後退の間のアジア再考」

今次ヨーロッパ東南アジア研究会議に参加して、ヨーロッパ各国、米国及びアジア諸国の研究者と広く知遇を得られたという点で極めて有意義であったことはもちろんであるが、自ら発表をおこなったことによって、アジア諸国に対する賠償、経済支援等の問題を通じて、冷戦初期のアジアにおける日本の立場や行動及び日米関係について、改めて深く追究する機会を得たことは幸いであった。その成果は、今後の一般課程、特別課程等の教育において生かしていく所存である。

**（防衛研究所戦史部主任研究官）**